

日本発ウィーン便り：Theater an der Wien

ウィーンに滞在中は（短期間であっても）一度はTheater（テアター：劇場）に足を運びます。お目当てのコンサートやオペラのチケットを事前に一生懸命入手していくこともあれば、面白そうなプログラムがあれば当日券を買っていくことも。

ウィーンでは、ホテルなんかにも週ごとの劇場プログラム（オペラ・コンサート・バレエ・ミュージカルなど）を1枚にまとめたポスターが貼ってあって、なかなか優れたもの。

今回は実質1.5日の短いウィーン滞在でしたが、やっぱり何かみたいなあ、と。「何か面白そうなものないかな？」としばしポスターを眺めていたら、ありました。

Theater an der Wien（テアター・アン・デア・ヴィーン：アン・デア・ウィーン劇場）で、長い間、一度見てみたい！と思っていたHamburg Ballet（ハンブルク・バレエ団）の引越し公演 “Die Kameriendame”（ディ・カメリエンダーメ：椿姫）を見つけました。

たった3日間だけの公演ということでほぼ満席でしたが、何とか劇場の一番てっぺんに座席を確保。バレエの公演への期待と、久々にあの劇場に行けるのが嬉しくて、一日ウキウキでした。

Theater an der Wienは、少し前まではミュージカル専用劇場として有名だったんですよ。



日本でもすっかりおなじみになった“Elisabeth”（「エリザベート」）なんていうウィーン生まれのミュージカルが初演されたのがこの劇場。

「ミュージカル劇場」と聞くと、新しい劇場を想像するかもしれませんが、実はとっても歴史ある劇場なんです。

劇場の入り口。外観は国立歌劇場のように一つの独立した建物ではないので、知らなかったら通り過ぎそうな感じです。

このそっけない外観に対して、中はこんな感じ。私も初めてこの劇場に入った時は外と中の印象の違いに驚いたもんです。

そうです。舞台と客席の構造は国立歌劇場と同じような感じなのです。

（確かに素敵ですが、場所によっては舞台が半分しか見えなかったりするのが構造上の欠点ですかね。）

舞台上正面に見えるのは、もちろん、ウィーンの特徴、ハプスブルク家の紋章、双頭の鷲です。



この劇場、落成が1801年。さすがに当時の建物は一部しか残っていないようです。

あのBeethoven（ベートーヴェン）が音楽監督を務めた時代もあり、彼の交響曲3番（英雄）・5番（運命）・6番（田園）・そしてオペラ“Fidelio”（「フィデリオ」）はいずれもこの劇場で初演されています。その後も、有名どころでは1874年にはヨハン・シュトラウス2世のオペレッタ“Die Fledermaus”（「こうもり」）、1905年にはフランツ・レハールのオペレッタ“Die lustige Witwe”（「メリー・ウイドウ」）がこの劇場で初演されています。このどちらのオペレッタも今ではウィーンの年末年始に欠かせない作品です。

で、第二次世界大戦後は、空襲の被害が大きかった国立歌劇場の代替劇場としてオペラ・バレエが上演され、国立歌劇場の再開後は、一時閉館の危機もあったようなのですが（取り壊して駐車場にする案もあったとか?!）ミュージカルの劇場として生まれ変わり（私も「エリザベト」はじめ、ウィーン発のミュージカルを見に何度もこの劇場に足を運びました。）、さらにその後、2006年（モーツァルト生誕250周年）からは、再びウィーン第3のオペラハウスになりました。（オペラとバレエの劇場ってことですね）



劇場の様子。なかなか素敵じゃないですか？天井だってこの通り。

この日の演目、バレエ“Die Kameriendame”はハンブルク・バレエ団を率いる振付師 John Neumeier の作品です。オーケストラ、そして時にピアノ独奏のショパンの音楽とともに舞台が進んでいきます。

バレエは見る音楽だといつも思います。「椿姫」はオペラなどでも有名な作品ではありますが、言葉の助けを借りることなく、最小限でありながらも効果的な衣装と装置、小道具、照明、そして音楽。あとはダンサーの表情や体の動きだけでストーリーから感情まで全てを表現するんですから！まばたきする一瞬も惜しいくらい、一生懸命見ました。時に鳥肌ものの、本当に素晴らしい舞台でした。

終演後、劇場近くのカフェで公演パンフレット片手にしばし余韻に浸れるのもウィーンならではの夜の過ごし方です。

ウィーン第3のオペラハウス Theater an der Wien でした。

日本発ウィーン便り ~Theater an der Wien~ von Eriko T. am 24/08/14